
学校の軋む重さ

ん？ん？ん？ん！！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学校の軋む重さ

【Nコード】

N5840I

【作者名】

ん？ん？ん？ん！！

【あらすじ】

無事に【此処】という場所から抜け出した僕たちは、何でも屋を開く事にした。特に宣伝をしなくても、僕の周りには【能力者】が集まってくる。ある依頼によって、僕達は学校に忍び込む事になった。格好良く言えば潜入調査というやつだ。【能力者】とばれないように、^{しおひ}栞は何度も繰り返し言い聞かせてくる。僕はどんな形であれ、もう一度学校に通える事が嬉しかった。

【世界の狂う重さ】という小説の続編です。前作を読んで頂けると嬉しいのですが、いかんせん200話と長いので、抑えておいて欲しい要点だけ簡単に纏めます。

- ・【能力】というものがある。それは常識としてはありえないからである。だから【能力者】は捕まって施設へと送られる。
- ・【能力】を得る代わりに、【代償】も同時に持つ事になる。
- ・主人公は茉莉^{まつり}。一緒にいる女の子は栞^{しおり}。栞は男みたいな喋り方である。

よろしくお願いします。

序

悲惨な光景だった。

目を背けようとした僕に、栞の叱咤の声が聞こえる。

「これは君が招いた事だろう。目を逸らすな。だから私は関わるなと言ったんだ。それを無視した結果だよ。君は責任を持って見届ける義務がある。ある意味君が起こしたともいえるこの事態をね。」

改めて僕は辺りを見回した。

複数の人間が、呻き声をあげながら横たわっている。血を流している者もいるようだ。

僕は彼らの名前も知らない。否、本当は知っている筈だ。だけと思ひ出せないのだ。覚えようとしなかったから。

視線を正面の壁に移して、この状況を作り出した張本人を見る。

彼は怯えていた。頭を抱えて震えていた。

「違う。僕はこんな事をしたかった訳じゃない。僕はただ。僕は……」

「僕は？自分の気持ちに嘘をついてはいけないよ。君は心の底ではこうなる事を望んでいたんだろう？ずっとこうしたかったんだろう？」

栞が話しかける。いつもの口調に戻っていた。

「五月蠅い！！黙れ！！お前に何が分かる！！」

「分かる訳がないだろう？そうやって怒鳴っていれば誰かが助けてくれるとでも思っているのかい？」

そんなに近寄ったら危ないんじゃないか？栞があまりにも突っかかって行くので、僕は心配になった。

彼の【能力】が何かも、よく分かっているのに。

不用意に近付けば、栞も傷付けられてしまうかもしれない。床で呻

いている人たちのように。

僕の心配を知ってか知らずか、しかし栞は何かの宣告のようにさらに男に続けた。

「君は選ばなければならないよ。このままここでじつと震えているのか。それとも……………逃げるか」

「……………逃げる？」

「そうだよ。当たり前じゃないか。このままじつとしていても君は必ず捕まるよ、【特殊警察】にね。君の【能力】なんてちっぽけなものなんだから」

「ちっぽけだと！？」

ぎろりと栞を睨みつける男。

「ああちっぽけさ。試してみるかい？」

栞は不敵にもそう答えた。

1章 1話 ある朝の風景―01

いつものように目が覚めた。

いつものようにとは言っても、普通じゃない目覚めの方が珍しいのだから、毎日毎日こういう風な事を思う僕は何かおかしいんじゃないだろうか。

かといって、いつもと違う目覚めなんて、もう二度と体験したくないのだけれど。

この家で暮らし始めるようになって、一週間になる。いたって普通の家だった。

仮にも僕らは追われている身なのだから、もう少し隠れてすごした方がいいんじゃないかと思って栞に聞いてみたが、

「いや、心配する事はないと思う。あの男も自分のミスは隠しておきたいだろうからね。上司の記憶を書き換えるんじゃないかと思う。追っ手が来るとしても、それは奴が個人的にやとった者だろう。おそらく、ね」

と返された。一応その時は納得したものの、僕はいまだに不安だった。

目覚めが普通である事を毎日確認するのも、きっとそのせいなのだろう。たぶんきっと。

洗面所で顔を洗い、タオルで拭く。

階下でテレビがぶつぶつ言っているのが聞こえる。どうやら栞は一回にいるらしい。相変わらず驚くほど朝が早い。

栞と二人でこの家に住んでいる訳だが、栞は何とも思っていないらしい。

仮にも僕は男なのに。少し心外ではあった。

これも毎朝思う事だが、なかなかいい家だった。勢いで出てきたのはいいけど、暮らしをどうするかとかは全然考えていなかったの、実に助かる。栞は「別にいいよ」と言ってくれているが、いつかお金を返さなければ。

この家は、栞が全部お金を出している借家だ。

啞然としている僕に対して、

「給料だけはよかったからね、金はそれこそ腐るほどある。講座が止められていないか、それだけ心配だったけど、どうやら問題ないようだ」

と当然のように栞は言った。

1階のドアをガチャリと開ける。

「ああ、おはよう茉莉君^{まつり}」

「おはよう。何を見ているんだ？栞がテレビを見るなんて珍しいね」

「珍しいかな？……… やつと生活が落ち着いて来たからね。余裕が出来たんだろう」

「ふーん。で、随分熱心に何を見ているんだ？」

「ああ、君も見てくれよこのビデオ」

ビデオかよ！！と突っ込みそうになったがこらえた。「カメラが捕らえた大自然の驚異！！」という、まあよくありそうな特番だった。「どれどれ？…これがどうかしたのか？」

「まあね。こういうのって、誰も死ななかった場面を使うものだろう？。」

「そうなのか？」

「…そうなんだよ。でもこれは、死んでるんだよ。司会者があまりにもあつさりと「死傷者は5人です」というから、聞き逃しそうになっただけだね」

熱心に見ている栞には悪いが、僕はあまり興味を抱かなかった。

「このテレビ局は、大丈夫なのかな？ 苦情とか凄いいんじゃないか？

……うむ、興味深い」

一人ごとを言う栞を横目に、朝食の準備に取り掛かった。

2話 ある朝の風景―02

「…………… 栞もトーストでいいのか？」

テレビを真剣に見ている栞に問う。

「ああ、よろしく頼むよ」

「ん、分かった」

パンにチーズを置きながら、このままではまずいよなあと思う。

僕も栞も料理がほとんど出来ないからだ。

いつまでも外食で済ますという訳にもいかないだろう。

「…………… 料理教室にでも通おうと思うんだけど」

ほかほかと湯気を立てるパンを乗せた食器を、机に置きながら言う。

「駄目だ」

にべもなく言う栞。視線はテレビに向いたままだった。

「何でさ。お金なら自分で何とかするから」

「お金の問題じゃないんだよ」

パンを皿から掬い取り、ようやく僕の方を見て栞は続ける。

「外食で別にいいじゃないか。若いんだから」

「それこそ関係ないよ。それに、あんまり夜出歩くと、追っ手に捕まるかもしれない」

あつつ、とパンを一度皿に戻しながら、栞は僕に対して呆れた顔を向けた。

「あのねえ。君は勘違いしているよ。私達を追いかけているのは、決して殺し屋じゃないんだから」

「でも」

「それよりも怖いのは、人と深く関わって、顔を不用意に覚えられる事だ。だから適当に店を選んで外で食べてればいいんだよ。習い事やバイトの類いは、だから積極的に避けるべきだ」

ずず、とコーヒーを啜りながら栞はそう続けた。

「でも!！」

「でも？」

特に何も考えてなかったので、栞に聞き返されて少し焦る。

「…………でも、どういう形であれ人と関わっていかなきゃ、あくう亜空達の居場所の手がかりが掴めないじゃないか」

「はん。君は【特殊警察】の持つ【施設】の情報を、料理教室の先生が知っているというのかい？」

「そうじゃないよ。そうじゃないけど…」

「とりあえず、君も早く座るといい。せっかくのパンが、冷めてしまっよ」

何か言い返したいのに、何も言えないまま、僕は栞の向かいに腰を下ろした。

そんな僕の目を覗き込んで、

「何よりね、君の【代償】の事があるだろう。のんびりできる内は、精一杯のんびりしておくのが一番だよ」

と栞は言った。

3話 ある朝の風景―03

「ところで茉莉君。頼んでいたものは出来たのかい？」

「ずず、とコーヒーを一口啜ると、栞が聞いた。」

「頼んでいたもの？」

「……………まあ出来てなくても、そんなに変わらないんだけどね。そう言いながらも、心底呆れたような目で僕をじりと睨む栞。」

「うーん、忘れてるんじゃない、急に問われたから聞き返したただけなんだけどなあ。今更言うと嘘っぽくなるか？」

「いや、出来てるよ」

「ふーん、何が？」

「何がって、だからホームページだろ？」

「……………何の？」

「何でも屋のホームページだよ」

「……………何でそんなものを作ったんだい？」

その理由は僕より栞の方が詳しいと思うんだけど。栞は怒ってしまったのか、執拗に質問を並べてくる。

「……………機嫌を直してくれよ栞。朝っぱらからそんなに怒っていると

」

しわが増えるぞ、と続けようとしたが、それがやぶへびになるだろう事ぐらいはいくら僕でも分かったので、出しかけた声を引っ込めた。

「……………怒ってると？なんだい？」

「いや、何でもないよ。それよりもホームページを作った理由は僕が聞きたいくらいだ」

「そのぐらい自分で考えなよ」

「……………いや、考えたんだけどさ。せめて検索サイトぐらいには登録しないか？」

僕達のサイトはこのままの設定だと、せつかく作ったにも関わらず、

某有名検索サイトだけじゃなく、あらゆる検索に引つかからない。直接URLを打ち込むくらいしかアクセスする方法が無いのだ。それならば何故ホームページなど作ったのだろう。

「だめだよ。さっきも言っただろう、あまり露出すべきではないと」
「でもアクセスする方法が無いじゃないか」

「それは考えてある。ほら、コレ」

と言って差し出したのは、昨日の日付の夕刊だった。わざわざ買ってきて来たらしい。

栞の指が指す部分を見る。【あなたの悩み、何でも聞きます。詳しくはこちらへ】という文字の後にURLが書いてあった。

「これで十分だよ」

「いやいや、こんな一行の文、見逃しちゃうよ」

僕がそう言くと、栞はあからさまに溜め息をついて言った。

「あのねえ茉莉君。君はもっと【代償】というものを理解しなくてはならないよ。断言しよう。身の回りに【能力】関係のいざこざがある人間は、無意識のうちにホームページにアクセスしてしまう筈だ」

4話 ある夜の風景―01

結局今日も一日これといった変化を見ないまま、夜を迎えた。

このままで本当にいいのか、と未だに悩み続ける僕の隣りでは、朶が本を読んでいた。

ピンポン

というどこか間の抜けた音が家に響いた。

朶も僕も、数秒の間ぼかんとしたまま固まっていた。

もう一度音がなつてようやく、それがこの家のチャイムだという事に気付いた。

鳴らす必要がなかったので、この家に住んで一週間にもなるうというのに、いままで聞いた事がなかったのである。

「……………心当たりは？」

朶が、弱冠の緊迫感を伴った声で聞いてくる。

もちろん、僕にはなかったので、黙って首を振る。

「ふむ。出るべきか出ざるべきか。普通に考えれば居留守を使ったほうが得策だと思うんだが、君はどう思う？ 茉莉君」

「……………仮に。もし仮に奴の差し金だしたら、居留守を使った所で、ドアを壊して入って来るんじゃないか？」

「……………かもしれないね」

「それに、関係なかったとしても、ここは僕は出ておくべきだと思うよ。近所付き合いかもあるし」

「だから。近所付き合いはしない方がいいんだよ」

「それは違つよ朶。まったく無視していた方が、帰って目立つ事も

ある。ある程度はしておく方がいい」

ピンポン

と急かすようにまた音になる。

「……………まあどちらにしろ、これだけ煌煌と明かりをつけているのだから、居留守というのは苦しいか。出てきてくれるかい？ 茉莉君」

茉莉の言葉に頷いて、僕は玄関へ向かった。

5話 ある夜の風景―02

……………どうしよう。

まずは覗き穴から姿を確認するのがいいだろうか。

玄関に着いたはいいものの、僕はまだ扉を開けられずにもたもたしていた。

「……………」

自分でも用心しすぎな気もするが、覗き窓に先に手を翳す事にした。覗こうとした途端に目を突かれたら洒落にならない。

この覗き窓が強化ガラスで出来ているのだとしても、相手がどんな【能力】を持っているか分かったものではないのだ。

ある程度の痛みを覚悟したが、当然のように何も起こらなかった。

びんぽーん

と更に呼び出し音が重なった。意外としつこいな。いないとは思わないのだろうか。隣人とかならもう諦めてもいいと思うのだが。やっぱり普通の人ではないのだろうか。

おそろおそろ、外を見る。

「……………ん？」

一瞬気を抜きそうになった自分を叱咤する。相手を外見で判断してはいけない。

扉の外では、どこかの学校の制服を着た女の子が、困った様な顔で呼び鈴を見つめていた。

ますます意味が分からない。家を間違っているんじゃないか？
ご近所さんだとしても、制服くらいは着替えてくるだろう。

ぴんぽーん

と再びの音。制服の女の子はおかしいな、とでも言いたげに首を傾
げている。

その様子は、居る事を確信しているように見えた。

このまま一人で悩んでいても落ちが明かない。僕は多少の危険を犯
してでも、ドアを開けてみる事にした。

6話 ある夜の風景―03

こついう時なんて声を掛けていいのか、僕は分からなかった。

知り合いなら「いらつしやい」とか「よく来たね」とかだろう。

知らない人でも、新聞屋とか、配達員とか、もう少し分かりやすい格好なら対応のしようもあるのだけれど。

目の前の女の子は、知り合いでもないし、分かり易い格好でもない。否、分かり易いと言えば分かり易いのか。制服なのだから。コスプレとかでない限り目の前の人間は学生だろう。

……もしかすると宗教の勧誘だろうか？その可能性はあるかも……いやないか。どちらにしろ制服というのが引つかかる。

「……何のようですか？」

結局僕は、そんな何とも言えない微妙な言葉を発した。

「あの、この家の人ですか？」

控えめに、聞こえるか聞こえないかぐらいの声で、女の子は質問に質問で返してきた。

それにその質問は何なんだよ。僕が泥棒にでも見えたのか？

「あー、まあそうですね。何のようですか？家間違えてないですか？」

一番有りえそうな可能性を提示する。

「いえ、それはそのう、間違えてないと思うんですよ」

声が小さい。語尾が聞こえにくい。僕は別に気にしないが、こんな話し方をしていたら、頑固親父とかに怒鳴られるんじゃないか？知らないけど。

「でも、僕はあなたの事を知らないんですけど。何のようですか？」
栞の知り合いだろうかとも考えたが、こちらから名前を出す気には
ならなかった。

「えー、だって知らないのは当たり前じゃないですかあー？初対面
なんですから」

だから。それをさっきから聞いているのだ。初対面なんだったら、
なお更何の用だか分からない。

「だから、何の用ですか？」

少し声が大きくなってしまった。僕は結構気の長い方なのになあ。

女の子はびくつとして、ますます声が小さくなった。

「ええー、お客さんにそんな大声出していいんですかあー？」

「お客さん？」

何の事だ？

「【茉莉何でも相談所】ってここですってますよねえー？」

7話 異様な訪問者―01

「それで？」

「それでつて？何がさ、栞」

僕がそう答えると、栞は欧米人のようなオーバーリアクションをした。

額に右手をあてて、溜め息を大きく一つ吐いたのである。

呆れられるのはもはやいつもの事なのだが、ここまでやって見せるという事は、本気で呆れているという事をアピールしたいのだろう。うん、きつとそうだ。そんな事ばかり理解出来ても意味がないのだが。

「それだけの会話で、君は彼女を信用して家にあげたのかい？」

「…………いや、だつてさあ」

だつてとは言ったものの、確かに少し迂闊だったかもしれない。ドアを開けるまでは自分でも呆れるほどに慎重になっていたのに、扉を開けた途端 というより訪問者の姿を確認した途端……それも違うか、彼女と話している内にだんだん 何だか気が抜けてしまったのだ。

「だつて？」

ちら、とドアを見る。今彼女はトイレに行っている。訪問して直ぐにトイレを借りるというのは些か疑問なのだけど。まあそのお陰でこうして栞と相談できているのだからよしとしよう。まだ帰ってくる様子はない。それでも僕は声が大きくならないように続ける。

「そんなに危なそうな子には見えないし」

「…………君はもつと慎重な人間だと思っただけだね」

「うん、僕もそう思うよ。見た目で判断してはいけないとも思ってたんだけど、話している内になんだか気が抜けてきちゃって」

「……彼女がかわいいからかい？」

「うん？」

いや、まあ、かわいいかかわいくないかで言ったら、間違いなくかわいい部類に入るだろうけども。

「いや、そういう事じゃなくて」

「まあいいよそれは。冗談だ。私が懸念しているのはそんな事じゃない。よく考えてみる、何故彼女はこの家の場所を知っている？」

「……？ホームページ見たからだろう？」

「君は本物の馬鹿か？」

随分な言われようだった。僕が答えを導き出すのを待たずに栞は続けた。

「あのね茉莉君。私も君が作ったホームページを見てみたんだが

まあ出来栄えについてはあとから議論するとしても 住所

は書いてなかったように思うんだが。それとも私の見た後に書き足したのかい？」

そういえば。連絡先は書いたが、住所は書いていない。連絡先も僕の携帯の番号だ。

家の番号を書いたのなら、それを調べて辿ってくる可能性もあるが、携帯ではそれも不可能だろう。

「やっと分かったみたいだね。今この状況で現れる依頼者の異様さが」

栞がそう僕に諭すように言ったのと同時に、リビングのドアがガチャリと開いた。

8話 異様な訪問者Ⅰ 02

「湊渡ゆかりくみなとゆかりくです」

女の子　湊渡さん　はそう自己紹介をした。尻すぼみの、やはり聞こえにくい声で。

「……………片瀬栞くかたせしおりくだ」

礼儀として、栞も自己紹介を返した。但し偽名で、だ。片瀬というのは本当の名字はない。らしい。本当の所は教えてくれないから分からないのだけど。これから活動していくに際し、名字が無いというのはあまりにも不便だから、適当にその時読んでいた本の主人公から拝借した名字である。

「同じく、片瀬茉莉くかたせまつりくです」

栞に続き、僕も自己紹介をする。自分から教えたがらない栞に対し、僕は名字を覚えていない。あの時記憶を思い出したけれども、その中に名字の情報は入っていなかった。そんな大事なものを忘れるわけがないとも思う。でも僕にとって、名字はそれほど大事なものはなかったのかもしれない。それどころか、憎むべき対象であったのかも。……………止めよう。このまま続けていてもあまりいい方向に想像が進んでいく気がしない。それよりも今は、この目の前の湊渡という女の子の危険性について、だ。

「ええく？二人は兄妹なんですかあく？」

湊渡さんは、声だけは驚いたように言う。声だけは、と表現したくなったのは、その言葉を言う前と後に外見上の変化が一切見受けられなかったからだ。指を肩口まである黒髪に絡めて、くりんとする作業？を繰り返している。

……………その容姿は、やはりかわいい部類に入るだろう。先ほどは光量が足りずによく観察出来なかったが、柔らかい蛍光灯の下で見る

彼女の顔は、漆黒の髪と比例してその白さを際立たせていた。白すぎる気がしないでもない。それはもう病的とも言える程に。太陽の光を浴びる事を忘れてしまったかのように。

「……そうだが。何か不満でも？」

「いえ。不満なんてありませんよ。あまり似てないなあ。って思ってたんです」

「そういう事は、思っても言わないようにするものだと思うけどね」
「茉莉さん。栞さん今日機嫌悪いんですかあ？何だかずっと言葉で責められてる気がするんですけどあ」

湊渡さんが僕に対して質問する。頼むから僕に話を振らないでくれ。……まあそういう訳にもいかないか。話に入り込むタイミングを与えてくれたと考えておこう。

「……いや、大体いつもそんなものだよ」

「そうなんですか。大変ですね」

「慣れれば大丈夫だよ」

「……それに弟はMの気があるみたいだからね。私のこの口調を仕込んだのも実は弟なんだよ」

「そうなんですか」

「無いよ！！別に！！仕込んでもないし！！」

初対面の人間に変な情報を吹き込むな。信じそうになっているじゃないか。

それに僕が弟かよ！！

その後も数分に渡って、いつものようなやり取りが続いた。僕は思わず、湊渡さんがそこに居る事を忘れそうになってしまった。

僕と栞のやり取りを、かんらんかんらと湊渡さんは笑って見ていた。

栞はそんな湊渡さんを、あくまで冷静に観察していた。

この人間は敵なのか、味方なのか、を見極める為に。

9話 異様な訪問者―03

「……ところでね、湊渡君」
ふいに。

僕でさえふいにと思えるタイミングで、栞が湊渡さんに話しかけた。

「え？……君？」

いきなり話を振られた事にも驚いたようだが、自分の名前を「君」付けで呼ばれた事の方が気になったらしい。

だから助け舟を出す。

「気にしないでいいよ、湊渡さん。君付けで呼ぶのは栞の、その、癖みたいなものだから」

「はあ。そういえば茉莉さんの事もそう呼んでいますよねえ。それも仕込んだんですかあ？」

「違うよー！」

誤解が解けていない。

冗談かもしれないが、どちらにしる困ったものだ。

「まあそれはどうでもいいんだ。依頼を聞く前にどうしても聞いておきたい事があるんだけどね、湊渡君」

どうしてもはよくないのだけれど。

どのようにこの家に辿り着いたのかを、いよいよ尋ねてみるつもりらしい。

「……………なんですかあ？」

別段警戒心を抱いたようにも見えない港渡さんが問い返す。
ふむ。どのように質問するのか見ものだ。

「君は、この家の場所をどのようにして知った？」

直球だった。これ以上ないほどに直球だった。

「どのようなにつて、ホームページを見て来たんですよあ？」

「それはおかしいね、この家の住所は書いてなかった筈だ。そうだったよね、茉莉君」

「そうだね」

「それは…」

明らかに困惑したように、言葉を濁す湊渡さん。

この返答如何によつては、平和な日常が崩れ去ってしまう。

10話 訪問者の秘密―01

「えつとおゝ、それはあゝ」

「それは？」

どんな些細な表情の変化も見逃すまいと、湊渡さんを半ば睨みつけるように見据える栞。

例え疚しい理由が無かったとしても、そんな事をする、言える事も言えなくなってしまうのではないだろうか。

「ええつとゝ、あのゝ、あれですよゝ」

「どれだい？」

逃がすつもりはないらしい。どうあってもこの場で、栞は湊渡さんがこの家を知っていた理由を突き止めたいと見える。

「んゝ、あのうそれって絶対言わなきゃ駄目ですかゝ、どうしてもよくないですかゝ」

「絶対だ。どうでもいい訳がない」

「えゝとおゝ、………………。なら言いますけどゝ、偶然茉莉さんが外で話してるのを聞いたんですよゝ」

「……………誰と？」

「……………」

そこで二人は暫し沈黙し、示し合わせたように僕の方を見た。

その可能性は限りなく低いとしても、もしかしたら本当かも知れない、という感じで、じとりと見る栞と、

縋るように、うつすらと涙を溜めて僕を見る湊渡さん。

……………。

いや。いやいや。

そんな目で見られても。

なあ栞。いくらなんでも。いくらなんでも僕がそこまで間の抜けた行動をする訳がないだろう？

湊渡さんも。初対面の僕に、何を期待しているんだ。悪いけど、僕には色仕掛けは通じない。そんな上目遣いで見られた所で、どうという事はないのだ。

「……いや、覚えがない。悪いけどね、湊渡さん。僕達はこの町に引っ越して来たばかりだから、何でも屋を始めたという、そんな報告をわざわざするような知り合いはいないよ」

「だそうだ」

「……………うう」

「答えにくいなら、私が当ててあげようか」

何を思ったのか、栞がそう言った。どこか嬉しそうに、楽しそうに続ける。

「君は【能力者】だね。この場所も、君の【能力】で知ったんだ、そうだろう？」

11話 訪問者の秘密―02

「い！！いえ！！いえいえ！！ちつ、違いますよ！！何言ってるんですかあ栞さん！！！」

……………。

僕でも嘘を取り繕っているのが分かる程に、湊渡さんはあたふたとしていた。

「……………あのさ、湊渡さん？」

おそろおそろ声を掛ける。なるたけ刺激しないように気をつけたつもりなのだが、湊渡さんは炊飯器を空けたら黒いアレが這い出してきたような顔をしていた。

もう少し柔らかく言うとか、曲がり角を曲がったらお化けを見つけた時のような顔をしている。まあようは、とんでもなく驚いているのだった。……………そんな顔をされるとさすがに傷つくんだけど、僕も。

どのように誤魔化すかを考える余り、この部屋から僕の存在を失念していたとでもいうのだろうか。

「ひゃ、え、あ、はい！！あ！！茉莉さん！！茉莉さんも言ってあげて下さい！！そんな筈ないじゃないですか！！？」

いや、だから。

僕の事を余り信頼しないでほしい。会ってまだ一時間も経っていないのに、彼女が【能力者】ではない事を保障できる訳がないじゃないか。

「茉莉君」

ふと、栞が僕に話しかけてきた。

「ん？」

「彼女はなかなか面白いかもしれないね」

「は？」

「君よりもリアクションが激しい人間がいたよ」

「そのぐらいいくらでも居るよ！！そんな変な事で一位になりたくない！！」

「いやあなかなかいないよ。突っ込みの面白さは置いておくとして、そこまで他人の言葉に関心を払える人間は珍しいよ？　それで、
どついう【能力】なのかな、湊渡君」

「いえ！！ですから！！私は！！」

彼女が余りにも慌てているので、僕は何だか可哀想になってきて、助け舟を出してあげる事にした。

「湊渡さん、勘違いしてるようだけど、僕達は君が【能力者】と知った所で、間違っても警察に通報したりしないよ？」

12話 訪問者の秘密―03

湊渡さんは、僕が言った事がすぐには理解できないようで、ポカンとしていた。

蘇った僕のこの記憶が、アイツに植えつけられたものでないという保障はないが、【能力者】であるという事を知られるというのは、その人間に最大の弱みを握られる事と同義であるから、この反応も分からないではない、か？

「【能力者】を発見せしものは、直ちに1×0に通報する事。これに背いた者はその背景事情に関わらず、懲役30年の刑に処す。なお、通報者の情報は秘匿される」とかなんとかいう特別法律が有ると、確か栞から教えられた気がする。聞いた時にも思ったが、改めて思い返してみると、とんでもない悪法だよなあ、これ。誰が【能力者】かなんて、自分からひけらかしたりしない限りまず分からないのだ。栞には他意が無いからよかったものの、今の栞と湊渡さんを見ていても分かるが、魔女狩りが蔓延るんじゃないのかコレ？ 嫌いな人間を、何人かで強力して【能力者】だという事にしたり。……。

実際どうなんだろうか。あの場所で目覚めてからこっち、【能力】持ち以外の人とまともに喋った事がないからよく分からない。すっかり世間ずれしてしまったのだろうか、僕は。

「……………そうなんですか？……………。あ！！！！じゃなくって、私！！違いますから！！【能力】とか知らないですし！！」

湊渡さんは、呆れる程に嘘が下手なようだった。よくこれで今まで

通報なりされていないものだと思う。

これまで誰もカマをかけなかったのか、よっぽど友人に恵まれているのか、それとも最近【能力】が発現したのか、もしくはそれ以外かは分からないが、彼女はとても危ういように思えた。

「下手すぎる嘘はみつともないよ、湊渡君。……………君の心配も分かるが、こつちにも事情がある」

おい、出会って間もない子に喋るのか、栞？

慌てて栞を見る僕。とがめるような視線になっていただろう。

「事情？」

「ああ、私達に通報するメリットがない。それに私がしようとしても、このお人よしが力づくで止めると思うよ」

僕は別にお人よしでも何でもないんだけどね。

「メリット、ですか？」

「そうだよ。実はこの茉莉君も【能力者】なんだ。わざわざ仲間を売る必要はないだろう？」

「ちょ、栞！？」

まるで自分は【能力者】じゃないような言い方をするなよ。酷くないか？

暫らく何か考えていた湊渡さんだが、ようやく落ち着いたようだった。

「分かりました。茉莉さんを信じます」

……………僕を信じるのか。栞の事はどうなんだろう？考えても詮無いことだが。

「それがいいね。それじゃあ依頼の事を話してくれるかい？」

13話 見つけて欲しいものー01

「えっ！？あのぉ」

「ん？どうした？何を言いよどんでいるんだ？君はそもそも依頼をしにこの家に来たんだろ？」

「ええ、はい、まあ、そうなんですけど、そのぉ」

何だろう？何を言いよどんでいるんだろ？

「ああ、【能力】の事なら別に言わなくてもいいよ」

僕には検討もつかなかったが、栞は何でもないように答えるのを見て、なるほどと思った。

「え？そうなんですかぁ？」

「そうだよ。君が何か言いたいのなら言えばいいし、何も言いたくないのなら言わなければいい。実際の所、君が【能力者】であるかどうか、まだ分からないのだからね」

ここまでの話の流れから、あきらかに彼女は【能力者】だろう。でも、それは湊渡さんの口からはつきり聞いた訳でもないし、言葉の上だけでもあやふやにしておこうという判断だろう。

それでも湊渡さんは、どこか納得のいかなそうな表情で、しばらく何か考えるように黙っていたが、やがて口を開いた。

「探して欲しいものがあるんです」

「探して欲しいもの？」

僕がオウム返しすると、湊渡さんは困ったように頷いた。

「ほら茉莉君、話の腰を折るなよ。まだ彼女が話している途中じゃないか。それで？それはどういったものなのかな？」

「いえ、それが、分からないんです」

「分からない？」

「……………続きを」

「私の学校に、何か私にとって大事なものがある筈なんです」

「それはなくしたって事？」

「それも分からないんです」

「……………要領を得ないな。同級生に頼めばいいじゃないか。何も部外者の私達に頼む必要は無い」

「一応頼んではいるんですけど。きつと友達には見つけれられないものなんですよ、そういう気がするんです」

「ちよつと待ってよ湊渡さん。何か分からないものを僕達に見つけて欲しいっていうの？」

「まあ、はい、そうなんですけど、何でも屋さんなんですよね？」

14話 茉莉と栞 01

結論から言うと、僕達は【学校にある何かはよく分からないけど大切なものを探して欲しい】という、掴みどころのない漠然とした依頼を受ける事にした。意外だったのは、こんな変な依頼なのに、栞が乗り気だった事だ。

具体的な内容をもっと詳しく話を聞こうとしたが、もう時間も時間なので、また後日という事になった。

送っていかとも思ったが、栞に無言で睨まれたので、それは止めておいた。確かに、彼女が敵でないと決まった訳ではないのだから、それは危険すぎるかもしれない。

「意外だったよ、栞」

「ん？」

「湊渡さんの事を結構信頼してるみたいじゃないか。依頼を受けるのにも肯定的だったし」

「信頼する訳がないだろう。何か勘違いしてるようだが茉莉君。私が彼女の依頼を受けようと思ったのは、彼女の事を信頼したからではなく、彼女の【能力】が非常に魅力的だったからだよ」

「え？でも彼女の【能力】が何か分からないじゃないか。どちらかというと、君が言わせなかった節もあるし」

「それでも大体の予想はつくだろう。………何かを【探す】という【能力】を持つ人間と有益な関係を築いておけば、後々皆を助ける時に便利だろう？」

「………探すとはいっても、あんな漠然とした所までしか分からないんじゃない、あまり意味がない気がするけど」

「何を言ってるんだ君は。今は情報がほぼゼロの状態なんだよ？大きな前進じゃないか」

「でも」

「それにね、前に彼女に似た症状の男性と……」「会った」事があ
るんだが、漠然としたものでも探せるというのは、便利なものだよ」

「……彼女の【能力】を利用するために、手を貸すって事か？」

「そうなるね」

「そんな！！そんな不純な理由で」

「何が不純だ？馬鹿な事をいうなよ。誰かを助けた見返りに、何か
を要求するのは当然の事だろう。無条件で他人を助ける人間などい
ない」

「そんな事ない。友達の頼みなら、無条件で聞く事もある筈だ」

「……第一に、湊渡君は絶対的に他人なんだが。その君のいう事
も、その友達の【信用】を得る為にする事だろう？女性に優しくす
る男性も同様だ。女性の【愛情】や他人からの【評価】を得たいが
為にそういう事をする」

「それは極論だよ。もっと他人を信用したらどうなんだ、栞？」

「できない」

「……」

「茉莉君、君はね、少し純粹すぎるよ。その年齢にして信じられな
い程に」

栞はそう言った。

15話 茉莉と栞 02

「……………栞」

自分がそれほど純粋な人間であるとは到底思えなかった。が、それを言った時の栞がやけに寂しそうに見えたので、僕は思わず声を掛けた。

「何かな？」

そう答える栞は、まさしくいつもの栞だった。やはり僕の見間違いだっただろうか。

「……………ん。分かったよ。依頼という形で受ける以上、何らかの報酬があるのは、考えてみれば当然の事だった」

「分かればいいさ。私も少し言い方が悪かったようだしね」

「ところで栞、依頼を受けるのはいいけど、具体的にどうするつもりなんだ？さっきの話でも少し出てきたけど、部外者の僕達が入り込むのは少し難しくないか？いくら年齢的には問題無いとはいえ」「少しどころか、とても難しいだろうね。次に会った時に聞いてみないと分からないが、もしかすると彼女の学校は女子校かもしれない。そうでなくても、学校という閉じられた空間は、異物を容易く発見、排除する」

「女子校なら僕にはどうしようもないね」

「……………ま、それはないだろうね。もしそうだとすると、いの一番にそれは言うだろうから」

「……………大学ならまた少し話が変わってきそうだけど。どうやって探すんだ？【何かよく分からないもの】を」

「……………ねえ、茉莉君」

「ん？」

「君はもう一度学校に通ってみる気はあるかい？というか通いたいかい？」

「何を言い出すんだいきなり。君にしては珍しく話が飛ぶね」

「話は別に飛んでいないよ。で、どうなんだい茉莉君」

「そりゃあ、通えるものなら通いたいけど」

「……………ふむ。ならそうしよう」

「ちょ、ちよつと待ってくれ栞。通いたいからはいどうぞ、ってほど簡単にはいかないだろ？家を借りるのは話が違う」

「……………私の知り合いに、金さえ積みめば何でも売ってくれる男がいる。そいつに頼めば、一週間もあれば転校手続きが整う筈だ」

「待ってくれ待ってくれ。通いたいと言ったけど、そんなアンダーグラウンドな話はごめんだよ。危ないじゃないか、それは施設に居た時の知り合いだろう？通報されておしまいじゃないのか？」

「それは問題ない。確かに施設に居た時の知り合いだが、私の個人的な知り合いだ」

「個人的な？」

「ああ。いろいろ世話になっている、効果の薄い薬を買ったりね。金がある限りはこれからも世話になるだろう」

効果の薄い薬？

「いやそれでも、だよ。その男が本当に信用できるか分からないだろう？」

「少なくとも湊渡君よりは信頼できるよ。この家を借りるのにも一役買ってもらっているし」

16話 茉莉と栞 03

「湊渡さんよりって、まるで湊渡さんをまるで信用していないような言い方じゃないか」

「ようなも何も、私が湊渡君を信用している訳がない。当たり前じゃないか。初対面だよ？そこまで心を開ける君の方がおかしいと私なんかは思うけどね、茉莉君」

「でも敵ではないだろ？だから栞も依頼を受けたんじゃないか」

「依頼を受けた事と、彼女が私達にとって利益を与える人間か否かというのは全く別の問題だ。もし彼女が私達を陥れようと画策しているのだとしても、それを逆に利用してやればいい。伊達に3年間以上も自分を騙し続けていないよ、騙しあいは大得意分野だ」

初耳の情報が含まれていた。栞が【能力】を【発見】したのは、どうやら3年以上前らしい。

「それでもさ、彼女はいい人だと思うんだよ。嘘をつけそんな人には見えなかった」

僕がそう言つと、栞はだらんとしていた姿勢を心持ち正して言った。「ん、どうしたんだい茉莉君。今日の君はどうかしてるんじゃないか？やけに彼女の肩を持つじゃないか。まさか本当に一目惚れしたとか言い出すんじゃないだろうね」

「違うよ。それを言うなら栞だっておかしいじゃないか。普段は色恋沙汰の話は全くと言っていいほど振ってこないのに、今日はやけに話題にしている」

「する必要がないからしなかったただけだ。だいたい、あの場所を脱出してから関係らしい関係を持ったのは湊渡君が始めてじゃないか」「そうだよ！！だから僕はせっかくの訪問者を無碍にしたいくないと言ってるんだ」

「無碍になどしてないし、そういう話は今してないだろう。論点がずれている。彼女は「依頼者」なんだ。そこをずれて認識しては

いけないよ」

「それだよ。その態度が気になっているんだ」

「……………」

「今は依頼者かもしれないけど、同じ学校に通うのなら友達にもなるかもしれないだろ？」

「……………今度は何を言い出すんだ」

「まあ聞けよ。栞の言葉をさっきから聞いていると、そういう関係には絶対にならないと、信頼関係は築かないといっているように見える」

「何を言っているのかよく分からないが、その通りだよ。信頼関係なんて必要ない。私は未来永劫、知り合い以上の関係を築かないと決めたんだ」

「……………じゃあ僕はどうなんだよ」

「それを聞くのか。無粋な奴だな、君は」

「答えてくれよ。前から嫌だったんだ。何だか軽く扱われているような気がして」

「どう扱われるのがお望みかは知らないが、君もちろん「知り合い」の一人だ。それ以上でも以下でもない」

「それで君は寂しくないのかよ、栞！！その年齢で心を閉ざすなんて虚しいじゃないか！！」

「……………！！もういい。今日はここまでにしよう。今日君はやはりどこかおかしいよ。もっと理路整然として話してくれ。……………その君の今の状態が彼女の本当の【能力】なのかもしれないね。狙った男性を惚れさせるとか。は。下らない。本当に、実に、下らない」
「そっつい残して栞は、別段怒った様子もなく、たんたんとして部屋を出ていってしまった。」

17話 見つけて欲しいものー02

「ふむ、それじゃあ本当に手がかりの一つもないんだね」

栞がコーヒーをずず、と飲みながら湊渡さんに聞いた。

時間は夜で、場所は適当に選んだファミレスで、湊渡さんは今日も制服を着ていた。学校が終わるのを待ってから集まったのだから、当然といえば当然かもしれない。十分家に帰るくらいの時間はあったと思うのだが、いちいち帰るのがめんどくさかったとか、急な用事で予定より帰るのが。

「はあ、まあ、そうなりますかね」

湊渡さんは髪をいじりながら答えた。

「それではさすがに困るんだけどね。確かに私達は何でも屋だけけれど。手がかりの一つも無ければそれこそ手の付けようがない」

「そう言われてもですね、本当に何も分からないんですよ、でも私が【それ】を必要としているのは間違いないんです」

少し申し訳なさそうに言う湊渡さん。

「……………何故【それ】が必要なのは分からないの？」

黙って二人のやりとりを眺めていたが、僕も会話に参加する事にした。

「いえ、だって【それ】が何か分かりませんから、何に使う為に必要なのかも分かりませんよ」

まさしく埒があかない。こんな依頼を本当に達成できるのだろうか。

「……………少し方向性を変えようか。君は【それ】が今すぐ必要なのか、それともこれから必要になるのか、それは分かるのかい？」

「それは…………。うん。…多分もうすぐ必要になるような気がするんです」

「何でそう思うんだ？」

「え、それは、何となくです」

「……………まあ、半歩前進といった所か。それなら次は……………最近身の回りで何か変化はあったかい？」

「変化ですかあ？いえゝ特にはありませんよゝ」

「ならそれは現段階では見つけれないものなんじゃないか？その何かが起きてから、必要になって始めて現れるものじゃないのかい？」

「いえゝそれは無いと思いますよゝ。だってもう何となく感じるんですよゝそれが絶対に必要だつてゝ」

「何か分からないのに？」

「はいゝ」

「よわったな。ここまで何も分からないとは思わなかった。……………」

……………やはり実際に見て回るしかないみたいだね、茉莉君」

「そうみたいだね」

「はあゝ、じゃあ先生方には私から言っておきますからゝ」

「その必要は無いよ。というか湊渡君。君はそんな実態の掴めないものを一日や二日で見つけられるとも思っているのかい？」

「えゝ、どういう事ですかゝ？でも変な事すると通報されちゃいますよゝ？うちの学校、最近不審者騒ぎが有ったから、その変は敏感になってると思いますしゝ」

「心配はありがたいが、私達は堂々と正面から学校に入り、その【何かよく分からないもの】を搜索する」

「はあゝ」

湊渡さんは明らかに困惑していた。まあそれはそうだろう。

朶が、見せてやれ、といったように僕に視線を向ける。

いや、だからさ、何でそこを僕に任せるんだよ。自分で見せればいいじゃないか。まあ別に文句もないので、僕はポケットから取り出したものを見せた。

「僕達は明日から、湊渡さんと同じ井上高校いのうえこうの生徒なんだ」

僕が出した学生証を、湊渡さんは事態がいまいち呑み込めないよう

で、ぽけーっと見ていた。

2章 井上高校 1話 転校生ー01（前書き）

主人公はあくまで茉莉と栞ですが、作品の進行をスムーズにするために、たまに視点が変わります。その時には、今回のように話数の前にマークをつけます。特に今回は、本作品のサブ主人公とも言える人間（前作でいう所の栞みたいな位置。どれくらい重要キャラになるかは未定ですが、栞と茉莉の学校での様子を、第三者の位置で見た場合のキャラです）なので、「」にしました。

主人公（茉莉または栞）はマークなし、サブは、それ以外はでいききたいと思います。

それではよろしく願いします。

2章 井上高校 1話 転校生―01

今日も、一日が始まる。

行きたくもない学校に、それでも僕は行く。

行かなければならないのだ。

いつも通りに母親に挨拶し、靴を履き玄関を出る。

今日はくもりである。

もっとも、晴れていても曇っていても雨が降っても、それこそ槍が降っても、僕には関係ないのだ。

機械的に僕は学校に行く。どうしても行かなければならない。負けたくないのだ。

つまらないプライドかもしれないが、学校に行き続ける事が、僕の示す意地なのである。

どうせ今日も、いつもと何も変わらない。

退屈で下らない、何の変化もない一日だと思っていた。

「おい、お前ら静かにしろー、今日はホームルームの前に、発表がある」

一日がいつもと違う様相を見せ始めたのは、担任のこの言葉だった。朝からどこかダルそうな担任が、頭を掻きながら続ける。

「あー、先生も急すぎてまだよく分からないんだが、今日このクラスに転校生が二人くるらしい」

ざわっと教室全体がざわつく。

馬鹿馬鹿しい。高校生にもなって、転校生くらいで、何故そんなに騒げるのか。

やはりこいつらは、馬鹿なのだ。馬鹿で馬鹿でたまらない、愚劣な

人種なのだ。

「おい先生よー、お前も分からないとかどうなってんの？この時期に転校生とかおかしくねー？」

僕の後ろから、男子生徒が聞いた。

「おい水木^{みづき}。何度言えば分かるんだ。仮にも俺は先生なんだから、敬語を使え！！ああもう朝からめんどくさい注意をさせるな」

「そんなら尊敬できるような行動取ってくれよ先生、何やつても適当じゃねーかお前」

「そんな事はないぞ。あーそれでだなー。うーん、そう言われてもなー、俺もよく分からのだな、これが。聞いてくれよ、俺も今日校長に知らされたんだわ、これが。どう思うよこれ、水木」

「はあ？俺が知るかよそんな事。それでどんな奴なんだ？男か？女か？」

先生と水木が、今日もいつものようにののしり合っていた。この二人は、先生と生徒とは思えないほどに仲がいいのだ。むかつく事に

「あー両方だな」

「はあ？オカマかよソイツ」

「違う違う。男と女一人づつだ」

「そんなら最初からそう言えよ。そういうところが適当だっつーんだよ」

「あー黙れ黙れ、どうやら来たみたいだからお前らちょっと黙れ」

クラスのざわつきは、次第に収まっていった。

何だかんだいって、このクラスの連中は、この適当な教師の事を気に入っているらしい。

そんな一切も、結局僕にはどうでもいい事だ。

「おい！！いいぞ！！入れ！！」

先生が大声で合図すると、教室のドアがガラリと開き、少し緊張し

ている男と、対照的にまったく緊張していなさそうな女が入って来た。

2話 転校生Ⅰ 02

「あーなんだ、じゃあ取り合えず自己紹介してくれるか、適当にでいいぞー」

先生がやはりダルそうに言う。何故こんな先生が人気があるのか、理解に苦しむ。

「片瀬茉莉です。よろしくお願いします」

男の方がそう言った。やはり緊張しているようだ。何を緊張しているのだろう。馬鹿馬鹿しい。

「片瀬菜です。……………よろしくお願いします」

女の方がそう言うてにこりと笑った。

兄妹なのか。全然似ていないな。それにしても、同じ日に転校してくるのだから、何らかの関係性があるのは当然か。

「よろしくお願いします」という言葉を付け足したのも少し気になったが、それよりも俺の斜め前にいた女が、「えっ？」と驚いたような声をあげた事の方が気になった。

確か湊渡とかいう名前だったか。

ほとんど喋った事もないので、詳しくは分からないが、この湊渡とかいう女は基本的に無口な奴だった筈だ。

その証拠に、今も注目を集めた事が恥ずかしいのか、俯いてしまっている。

もう一つ気になる事があった。

転校生の女の方が自己紹介をした時に、男の方が驚いたような顔をした事だ。

その表情の変化は一瞬の事だったが、あれは見間違いではなかった。

「席はまあ空いてる所に適当に座れ」

「馬鹿かよ先生ー。空いてる席なんぞねーだろーが」

「あんまり口が悪すぎると、俺も流石に見逃せないぞ」

「そこで怒るぞって言わねーで見逃さないってーのがおめーらしいな、先生」

「あーそうかい。それじゃーとりあえず今日はそこそこに座つとけ。明日までに何とかするから」

そう言つて先生が指差したのは俺の右横と、水木の左横だった。二人とも、どうやら今日は休みらしく、席が空いている。

男の方が、俺の横に座つた。茉莉と言つたか。

めんどくさいから、話しかけて来ないでほしい。妙な気をきかせて話しかけて来るような奴だつたら困るな。

後ろの方の席では、栞とかいう女に、さっそく水木がなれなれしく話しかけていた。

3話 栞と水木―01

何が嫌かというと。

私が何が嫌かというと。

それは簡単に答えが出る問題ではないような気がするが。

それでも私はこの水木という男が、どうも好きにはなれないようだった。

私に対するみえみえの下心が嫌なのではない。

初対面なのに、やたらなれなれしく話しかけて来るその態度がいやなのではない。

先生、それ以前に年上の相手に対して、少しばかりの敬語も使えないその軽薄さが嫌なのではない。

授業中にも関わらず、質問を止めようとしないその傲慢さが嫌なのではない。

きっと単純に馬が合わないのだろう。

だれしもそういう人間はいるものだ。それも結構な頻度で。人が百人居れば、その中に3人ほどは、何となく気が合わない人が居る。

だからこの男も、そういう人間の一人なのだろう。別段珍しくもない。

馬が合わない人間との付き合い方も、一通り心得ている。

相手が機嫌を損ねないように、相手が疑問に思わないほどに、適当に話を合わせていればいいのだから。

自分でもなかなか出来るのいいと思える笑顔を貼り付けたまま

虚しい気分を終始抱えながらも、鏡の前で練習したかいがあったというものだ。私は水木の質問責めを適当にいなしていた。

それでも今私は困っていた。

私達は、あまり目立つ訳にはいかないからだ。

せつかく自己紹介を無難にこなし、茉莉君も私の説得のかいあってか、無駄にクラスメートに友達を求めようとしていないというのに。これでは何の意味もない。

この水木という人間の、私という人間への興味を消失させる上手い方法でもないものだろうか。

4話 茉莉と和田―01

怖かった。

こんな風な言い方は、かなりの誤解を含みそうだが、僕は何となく、
栞が怖かった。

否、やはり怖いという言葉は、適切な表現ではない。

栞が自分を守るために、もう一人の自分を作っている事は知っていたが、あんなににこやかな栞は、なんだろう、気持ち悪い？

そうだ、気持ち悪いという表現が好ましいかもしれない。

さっきの自己紹介では、危うく声を出してしまう所だった。僕より先に湊渡さんが反応してくれたから、危うい所で声を出すのは踏み止まる事が出来た。表情は だろう、上手く隠せているといいのだけれど。

それにしても、栞はあんなににこやかに笑うことが出来たのか。

普段の栞は、ほとんど笑う事がない。というか、栞の笑顔を見たのは今日が始めてだったかもしれない。

例え作り物だとしても、あれは可愛かった。

「クラスで生活するに当たって、一番大事なのはとにかく目立たない事だよ、そこらへん君も徹底してくれ」と言っていたのはどの口だよ。転校初日から。実は栞は馬鹿なんじゃないのか？

目立つかどうかはこの際別にしても、先ほどから後ろの方で、さかに栞に話しかけている男がいる。

その男に対して、栞が笑顔で受け答えをしているのを見ると、何だかやはり怖かった。

あんなに人とは、変わるものなのだろうか。

一度、湊渡さんと目が合った時も、湊渡さんはいかにも何かを聞きたそうな目だったが、僕も何も分からないので、取り合えず首をすかに横にふっっておいた。

だからだろうか。

別の事に完全に意識がいつていた僕は、隣りの　　確か、えーと、名前が出てこないなさすがに、うーん、和田わただったかなあ？

男が僕の事を観察するように、見ていた事に暫らく気付く事が出来なかった。

5話 栞と水木―02

「へーそれじゃあ、栞ちゃんは結構大きめの方なんだね」

……………何の話だろうか。

反省しなければならない。

この水木という男の話が、余りにくだらなく、どうでもいい内容だからと言っても、余りにも意識を他へと向けすぎていた。

相手と話している最中に、進行中の話題を見失うなんて、失策も失策だった。

「……………そうですか？あまりそう言われた事はありませんけど」とりあえず。

あくまでも取り合えず話題を合わせておく。無難な言葉で濁して、この後の反応で話題の方向性を見極めるとしよう。

……………それにしても、会って1時間にもみたないのに、もう私は「ちゃん」付けで呼ばれているのか。

別に私は気にならないが、この軽がるしい態度は、男女問わず評価が分かれる所だろう。味方と同じ数だけ、敵もいそうなタイプだ。誰かと必要以上に親しくなるつもりはないが、この男とは特に親しくなるのを避けた方が無難なようだ。

彼もこういうタイプの人間はあまり好まないようだから必要ないとは思うが、後から茉莉君にもそのうまを伝えておこう。

「そんな事ないって」

「そこ！！五月蠅いぞ！！」

水木の言葉を、先生が遮った。

しかし怒られたのは以外にも、私達ではないらしい。

どうやら、茉莉君と、その横の和田君が怒られたらしかった

.....なるほど。面倒臭そうな教室に転校して来てしまったものだ。

6話 茉莉と和田 102

「？」

声には出さずに、和田君の方を見ると、彼は目線を外した。気まずそうな雰囲気はない。

「和田君……………だよね」

「……………何で俺の名前を知ってるんだ」

視線を逸らしたまま、彼はそう聞いてきた。

「それは」

しまったな。事前にクラスの名簿を手に入れて、名前をある程度覚えて来たなどと、言える訳もない。

「あ？それはなんだ？」

「それはアレだよ。あの。先生がさっき言ってたんだ。お前は和田の隣りに座れって」

微妙に苦しい言い訳だった。

「あの先生がか？嘘だろ？」

何でもあつさり見破られるんだ？僕には嘘つきの才能が欠如しているとしてもいうのだろうか。

と思ったが、どうやらそうではないらしい。嘘だと見抜いた訳ではなく、僕の発言の真実性を疑っているらしい。

「嘘なんかじゃないよ」

「そんな馬鹿な。あの出来損ない教師が俺の名前を呼んだだと？」

「出来損ない教師？」

「ああ、いや、なんでもない」

なんでもないって訳はないだろう。なんでもないのに、初対面の僕の前でこんなに取り乱すわけがない。

それは向こうも感じていたのだろう。バツが悪そうに言葉を付け足

した。僕にしか聞こえない程の小声で。

「……………そうだな。お前も覚えておいた方がいい。アイツはな、生徒のエコ鬚痕が酷いんだよ」

「エコ鬚痕」

「そうさ。お前もせいぜい嫌われないように気をつけるこつたな…

……………sonだけだ」

「そうは言っても和田君……………」

「それと。お前の事は何だか気にいったからこれも教えてやる。俺とはもう関わるな」

気に入ったのに関わるなとはどういう事だろう。

何故かは分からないが 強いて理由を探すなら、きっと馬が合ったのだろう この和田という人間とは上手くやれそうな気がしていたのに、そんな事を言われると悲しいじゃないか。

「……………それはどういう事」

「そこ！！五月蠅いぞ！！」

理由を問いただそうとしたが、その声は先生の怒声によって掻き消された。

注意されたのは、どうやら僕たちらしかった。

そんな馬鹿な。僕達を注意するのなら、それより先に、後ろの栞と……………水木とかいう奴を注意すべきだろう。

……………なるほど。面倒臭そうな教室に転校して来てしまったものだ。

7話 みんなで？ー01

当然のように、何事もなく僕の記念すべき？井上高校での一日目は終わった。

これから湊渡さんの【何かよく分からないもの】を探すのだから、これから何かが起こるかもしれないが、とりあえず授業は何事もなく終了した。

「茉莉君」

と呼ばけられたものの、僕は呼びかけて来たその声が、誰のものなのか直ぐには分からなかった。分からないというより、判断がつかなかったという方がより正確だろう。

というのも、聞いた事がないような声だったからだ。

否、聞いた事が無いというのは的外れもいい所だろう。何せ、この声の主と僕は「知り合い」なのだから。「知り合い」と「友達」と「親友」との境界線は、どの辺りにあるのだろう。彼女と僕が「知り合い」程度の新密度しか持たないのだとすれば、僕には「友達」と呼べる人間がいなくなってしまうそうだ。彼女が何と言ったって僕は彼女を「知り合い」だなんて他人行儀な枠に当てはめて置きたくはなかった。

だって彼女の行使するその理論でいくと、

強力な【能力】の【代償】として体に不思議な穴を持つ彼も、見たくも無いのに他人の心を見る事が出来てしまう彼も、簡単な範囲に限るが、自分の未来を選ぶ事が出来る彼女も、その他のあの場所で出会ったみんなも、

「友達」ではなく「知り合い」という事になってしまう。

そんなのは、あまりにもあまりにも、寂し過ぎるじゃないか。

あの日。といっても一週間程前だが、栞と軽い口論らしきものを交わした日から、僕と栞の間には確かに溝のようなものがある。予想通りというべきか、次の日の朝には何事も無かったかのような態度で栞は話しかけてきた。だから僕も自分を誤魔化してしまいそうになるが、確かに僕らの間には溝が空いてしまっていた。

否。違うのだ。そうではなく、溝はあの時「空いた」のではなく、もともと「空いていた」のだ。栞の心に確かに近付いたと思ったのは、全て幻だったのだ。僕の勝手な一人よがりだったのだ。

「……………おい、茉莉君。考え事は家に帰ってからにしないか」
少し低い、僕にとっては聞きなれた声が、耳元でした。

「……………あ、ああ。ごめん。で、どうしたの？」

栞はじとりと僕の事を少し睨んだあと、またあの聞き覚えのない声で言った。

「あのね、水木君が「みんなでカラオケにでも行かないか」って。歓迎会を開いてくれるんだって。茉莉君はどうする？」

栞はそこで声の大きさを落としてさらに続ける。

「できればごめん被りたいけどね」

どうやら栞は、学校では徹底的に仮面を被り続けるつもりらしかった。

8話 みんなで？ - 02

「で、どうするの、茉莉君」

言葉には出さないが、目で「是非とも断つてくれ」と訴えてくる栞。アイコンタクトが出来る程には仲がいいのに、それでも僕らは、どうしようもなく「知り合い」なのだった。ああいけない、考え込むのもいい加減にしておかないと、栞の後ろでにやにやといけ好かない笑みを浮かべている水木にも、変に思われてしまう。

「普通の、平均的な一般生徒を演じる事」

栞に繰り返し繰り返し警告された事だ。栞自身がもうすでに守れていないような気がするのだが、それはそれでおいておくでしょう。

「じゃあ、行こうかな」

と僕が答えると、栞はあからさまに不服そうな顔をした。……家に帰ったら、栞に注意してあげた方がいいかもしれない。そのキャラを押し通すのなら、何処で誰が見ているかも分からないのに、そんな顔をするな、と。

栞の反応は予想通りだったが、もう一人予想通りの反応をした奴がいた。水木だ。僕が行くと言うと、明らかに嫌そうな顔をした。どうせ、僕が行かないといえば、栞を口説く事に全力を注いでいたのだろう。「みんな用事があったみたいでな、悪いけど、これだけしか集まらなかった」とか言って、栞の周りを奴の手下だけで固めるつもりなんだ。

……とかまあ、ろくに話した事もない人間をそんなに悪く言うのもどうだろう。でもまあ、アイツを僕は嫌いだ。初対面なのに、何故か嫌いだった。自分でも珍しいと思うが、どうしようもなく、

この水木という奴とは気が合わない予感がする。

水木以外の視線をふと感じたのでそちらを向くと、湊渡さんが心配そうに、何かを言いたげにこちらを見ていた。

「でも茉莉君、引越してごたごたしているし、今日は早く帰ろうという話だったじゃない？」

もちろんそんな話はしていない。よっぽど行きたくないのだろうか。朶がこの男の事を良く思っていないというのは、朶にとってはありがたい情報だった。

「それは別に明日以降でも問題ないとも話した筈だよ、朶。せつかく誘ってくれてるんだから、行こうよ」

朶を見習ってという訳でもないが、朶も作り物の笑顔を貼り付けて答えた。

どうせ朶の返事がイエスでもノーでも、朶は無理矢理参加させられるのだ。朶が行かないという選択肢はない。朶の事だから心配ないとは思うが、万が一という事もある。それにこれは今日何となく思った事だけれど、今の作ってある方の朶は　というよりも、朶自身が本当は人付き合いに慣れていないんじゃないだろうか。朶にとって人と話すというのはこれまで、あくまで実験の一部であったんじゃないだろうか。だから、こんな風に話している朶は、かなり危ういような気がする　まあどちらにしろ、朶はついていく事に決めた。

9話 みんなで？ - 03

結局。

半分は想像通りに事が進んだ。

歓迎会に参加した人間は、僕と栞を合わせて15人だった。総勢40人のクラスだから、これはかなり多い方だと思う。何しろ、僕達が今日転校して来る事は、今日の今日まで誰も知らなかった筈だ。それ以前から別の予定が有った人間は当然来れないだろうし、僕達に興味が無かったり、そもそもこういう集まりが嫌いな人間のことも考えると、やはりかなりの人数が集まっている。

僕が来なかった場合の事は正直分からないが、僕が参加の意思表示を見せると、水木はそれこそクラスのほぼ全員に声を掛けていた。……やはりこの男の事を悪く考えすぎなのだろうか。とも考えかけたが、その考えは湊渡さんによって打ち消される事になった。

「よかったあゝ。栞さんを一人で行かせるんじゃないかって、私ひやひやしたよあゝ……あの………気付いてると思うけど………水木君には気をつけた方がいいよあゝ。あ、もちろん茉莉君が………って事じゃないよ？………あの………何ていったらいいのかなあゝ、ほらゝ、水木君って、その………カルいからあゝ」

カラオケで盛り上がる中、湊渡さんがそう話しかけて来た。僕としては、湊渡さんが参加した事が意外だった。それは水木も同じだったようで、一応という感じで聞いたのだろう。湊渡さんが参加の意思表示を見せた時、「え？来るの？」と思わず言ってしまったのが聞こえた。もしかするとこれを伝える為に参加してくれたのだろうか？………さすがにそれは都合よく考え過ぎか。

水木は、ちゃっかり栞の横の席に座っていた。栞は笑みを貼り付けたまま対応しているが、あれはどの程度本心からの笑顔なのだろうか。

僕としては残念な事に、和田君は参加していなかった。意図的に、ただ単に忘れていたのか、水木が誘わなかったので、変わりに僕が誘ったのだけれど、「誰が行くかよ」とにべもなく断られてしまった。

閑話休題。

いや、明らかにこちらの方が本題から外れる話なのだけれど。

僕は栞がどんな歌を歌うのか、とても気になっていた。

10話 電話―01

「それで？どうだったんだ？」

電話の向こうから、僕の友達――否、親友と言ってもいいかもしれない――がそう言った。でも親友だと思っているのは僕だけで、結局彼も、僕の事を知り合い程度の関係だと思っていたりするのだろうか。他人の考えている事なんて、分かる筈もないのだから。そういう風に考えていくと、もう誰も信じられなくなりそうで、僕はなんだか虚しい気持ちになりつつ答えた。

「どうって？それは何についての「どう」なんだよ、英知^{えいち}」

英知は、栞と同じ場所で出会った、僕の「親友」だ。僕にとって気の置けない、数少ない人間の一人だ。最も、僕はあの場所以前の記憶がいまいち曖昧なままだから、僕にとっては友達どころか知り合いも少ない人数しかいなかったのだ。これまでは。それが今日一日で一度に増え、急激な環境の変化に、僕は今少なからず困惑しているのだろう。

「いや、この場合は一つだろ、お前がわざわざ本道をそれてまで気にした事だよ。栞は何を歌ったんだ？俺だってそれは気になるよ。お前の話を聞いても、あの栞がにこやかに笑ったなんて、これっぽちも信じられないんだからな。実際に見るまでは」

英知とは、今でも定期的に連絡をとっている。あの場所を出た後、直接話したのは今の所英知だけだが、三人ともそれなりに元気にやっているらしい。生活資金や住んでいる場所など、個人的な情報を聞くと言葉を濁すのが少し気になる。悪いことをやってなければいいのだけれど。

「それなら直接会って確かめればいいじゃないか」

「まあ気が向いたらな。それより話を逸らそうとするなよ。栞はどういう歌を歌ったんだ」

いつもこうである。会うという話や、他の人間に電話を変わって欲しいという話になると、ふと話を変えてしまう。何か会えない理由があるのだろうか。フォリス（ふおりす）は今は仕方ないとしても、頼娃君にも変わってくれないというのは、どういう事なのだろうか。でも僕は臆病だから、その理由を聞かないでいる。聞くとか何か悪い事が起こってしまいそうな気がして、聞けないのだ。

「歌わなかった」

「え？」

「だから歌わなかった」

「何でだよ。その水木とかいう奴がマイク薦めたんじゃないの？」

「いや、まあ薦めてたけど、何か栞が頑なに拒んでた」

「はあ、何で」

「知らないよそんなの。よつぼど歌いたくなかったんじゃないの？僕もさりげなく進めてみたけど、もの凄い笑顔でもの凄く睨まれたよ」

「何だよもの凄い笑顔って。もしかしたら栞って、とんでもない音痴なのかもしれないな。それもまたおもしろそうだ。……それでお前は何を歌ったんだ？俺はむしろそっちの方が気になるかもしれない」

「………た」

「え？聞こえないぞ？」

「………歌わなかった」

「何で？」

「僕は音痴なんだよ！！悪かったな！！」

「………いや、別に、悪くはないけど。あはは。そうか栞おまえ。そうかそうか。くく。これはいい。音痴コンビカ」

「栞が音痴とは限らないだろ！！」

「あはは。怒るな怒るな。人には欠点の一つや二つや三つや四つ、あるもんだぜ？」

「欠点とかどうでもいいんだよ！！栞が歌わないもんだから、その分の矛先が全部僕に回ってきて、断るの大変だったんだからな！！」

「……………それはお前。それこそ栞に直接文句言えよ。俺に愚痴をぶつけられてもなあ」

「……………栞には、言えない」

「何で？……………ああそうか」

僕は何も言っていないのに、英知は何かを納得した。

「何を納得したのかは分からないけど、最近栞と変な感じなんだ」

「ふうん。喧嘩でもしたか？それはお前が謝っておけ。お前が悪くなくてもだ、茉莉」

「喧嘩、って感じではないんだよ」

「じゃあどういう感じなんだよ。もうちょっと情報をくれないと何もわかんねーよ」

「僕の事は「知り合い」としか思っていないって言われた」

「……………それは、……………どういう会話の中で言われたんだ？」

それは、と、僕が説明しようとする、電話の向こうが急にばたばたし始めた。と、焦ったような英知の声が響く。

「わりい。ちよっと切る。またかけ直すよ。続きはまた今度話してくれ」

別れの言葉をかける間もなく、電話は切れてしまった。

僕は何だかもやもやしたまま、しばらく立ち尽くし、やがてベッドにぼふと倒れこんだ。

11話 菜理と栞 04

ぬそぬそ、と、というような表現しづらい気持ち悪い感覚の中で目が覚めた。

なんだろう、この感覚は、ああそうか分かった。これは寝すぎた時の感覚なのだ。

眠りすぎて、起きてすぐには、頭も体も、上手く回らない。

何となく僕は目覚ましを見る。

短針が11時を指していた。

……… 11時。

11時？

11時！！？

遅刻じゃないか。栞も起こしてくれればいいのに。昨日マイクを薦めたのをそんなにも怒っているのだろうか。それとも怒っているのはその前の事か？つまり、僕が問い詰めた彼女の「知り合い」発言についての事だけねど。

いやそれこそないだろう。いくらなんでも、そこまでひきずるような彼女じゃない。………のか？僕が栞の何を知っている？僕は彼女の「知り合い」に過ぎないのだから。本当はあの発言にそれなりに怒っていて、僕を起こさなかったんじゃないか？

そうじゃないそうじゃない！！そういう事じゃないんだ今は！！遅刻だ！！2日目にして！！盛大に！！

僕ががばりと起き上がると、僕の体の上から何かがずりりと滑り落ちた。

昨日僕は寝る前に、何か置いただろうか？とにかく眠かったからよ

く覚えていないが、置いていないはずだ。じゃあ何だ？いやどうでもいい。急いで準備して学校に行かなければ。

僕はベッドの横に落ちたそれを、一応一目確認して、ドアへと向かおうとした。が、僕はその落ちたものを見て、それまでの動作を完全に取りやめ、不格好な姿勢で固まった。

「……………栞？」

栞が、頭を抑えながら起き上がる。

「……………どうして君は、寝起きからそんなに活動的なんだ」

「……………遅刻しそうだったから……………というか、栞こそどうしてここに」

「遅刻なんか別に気にしなくてもいいだろう。あの学校にはそれほど長い期間いないんだから。私なんかは、君が一日で学生生活に溶け込んでいる事のほうが不思議だね」

「……………栞は何でここにいるの？」

「……………。君は一応あの男の実験体だったからね。不特定多数の人間に接した事で、何か変化が生じるかもしれないと思って、観察していたんだ」

「観察なんてしないで、僕に直接聞けばいいじゃないか。何か思い出した事はないか、とか。答えるよそれくらい」

「……………。別にね。それだけが理由じゃないんだが……………」

「……………」

「ないんだが？」

「……………。言う必要がないから言わない」

「なんだよそれ。教えてくれよ」

「それを私に聞くという時点で、君はもうとつくに駄目なんだよ。」

「……………さあ、朝食兼昼食にしようか。学校には昼からいけば十分だろっ」

栞が部屋を出て行く。

何だよそれ。

12話 茉莉と和田ー03

転校2日目から学校を休むとは、馬鹿なのかそれとも何なのか。まあきつと馬鹿なんだろう。それにしても二人とも、か。

昨日のカラオケで何かがあったのだろうか。まあそんなのはどうでもいいことだ。

今日もやっぱり学校は下らない。

いつものように、やっぱり下らないのだ。

何も代わり映えのしない午前の授業が終わり、昼からも何も特別な事はおきないのだと、

考えるでもなく昼食を自分の机で食べていた。

教室の後ろの方は、やはり今日も騒がしい。水木を中心に、また下らない話題で盛り上がっているのだろうか。だがアイツが普通に学校に來ているという事は、やはり今日転校生の二人が來ていないのは、二人自身に何か問題があったのだろうか。

……………カラオケで爆発事故でもあればよかったのだ。

そうすれば、この下らない日常が変化するばかりか、このクラスの大半のどうしようもない人間どもが怪我を負うなりしていた筈なのに。いや、自分の考えの中で遠慮する必要はない、それこそあいつらが死んでくれたかもしれないのに。

もくもくと食事を続けていると、ギーという音がすぐ近くで聞こえた。

横目で見ると、どこかバツが悪そうにしながら、茉莉とかいう転校生が、席に座る所だった。

……ふーん。来たのか。昨日何かがあったわけではないのか。

なんにしろ水木と昨日一緒に行動したのだから、昨日のうちに俺についてある事ない事吹きこまれている筈で。つまりもう俺に話しかけてくる事もない筈だ。別にどうという事もない。いつもの事だ。

しかし茉莉は、
「今日の昼からの授業って、何だったかな？」
と話しかけて来た。

……何だコイツは。

13話 栞と水木―03

人は他人にほとんど興味が無い。

学校に昼から登校するという件について、茉莉君は「いつそそれなら休んだ方がいい」とか何とか訳の分からない事を言っていたが、どうという事はない。私の予想通り注目らしきものを集めたのは教室のドアを開けたその瞬間だけで。それにしたって「あ、来たのか」くらいのものだ。ちらりとこちらを見た後、各人それまでしていた事に取りかかる。友達と話していた者はその続きを。次の授業の宿題を移している者は机へと視線を戻した。机に突っ伏して寝ていた者は、こちらを一瞥すらしていない。

人は他人に興味を示さないのだ。なによりもまず自分の事。自分が満たされて始めて周りに目を配る余裕が出てくる。だから――だけれど――私は「茉莉」という人間にここまで興味を示しているのかもしれない。彼は変人だ。いろいろな意味で。だが変人でなければあの場所から生還する事など出来なかった。個々人が得体のしれない【能力】を持つあんな場所で、全員とそれなりに心を通わせていた。少なくとも通わせていたようには見えた。本当の所はどうなのか私にも分からないけれど。

つまり。結局人間は自分さえよければいいのだ。こんな風に決めつけると、あの変人はまた文句を言いそうだが、これは事実そうなのだ。あの場所で色々な人間を観察して来た私が弾き出した一つの真実。例外としては、親族や恋人、或いは――

「ああ来たんだね、栞ちゃん。なれない環境で病気にでもなっ

いかと心配したんだ」

例外の一つが話しかけてきた。例外とはつまりその人間に興味を抱いている人間だ。この水木の場合は私に対する明確なまでの下心。

――何故こんな人間が人気なのか。

分かっている。人が人を慕うのは、純粋な尊敬以外には、金、権力、力。或いはそれら複数。

昨日のカラオケを全員分奢っていた事からも容易に想像がつくが、この人間は金と、おそらく権力を持っているのだ。

「ちょっと昨日は疲れちゃって。寝坊してしまったみたい」

自分で話していて、果たしてこれは私なのか分からなくなる。また

「私」は「わたし」を作り始めているのかもしれない。まあまだ2日目だ。徐々にならしていかなければ。

「昨日は楽しかったね。また行きたいな。できれば今度は二人きりで」

気持ちの悪いウインクとともに水木がそう言う。どうやらこの男の事は、根本的に好きになれそうにない。

「そうですねえ」

私らしくもないが、曖昧に語尾を濁した。或いは湊渡君の口癖が移ってしまったのかもしれない。このいけ好かない男と二人きりなんてごめんだが、敵としてみなされるのは得策ではない。

「ところで栞ちゃん。茉莉君、だっけ？君の弟だけど、なんで和田なんかと話してるのかな？もしかして昨日の俺の話聞いてなかったのかな？和田はろくでもない奴だから話さない方がいいって遠回し

に警告したつもりだったんだけど。――どう思う、栞ちゃん？」

顔は笑っているが目が笑っていない。

「そんな事私は知らない。彼は変人だからね」と答えた所だが、二重の意味でそういう訳にもいかないようだ。

まったく、あの変人は。

やはりどうしようもなくトラブルメーカーらしい。

14話 探索一日目ー01

「ないですねえ」

図書館、焼却場、各教室など、まあそれなりに探してみたが、何も見つからなかった。

そもそもその程度の所はすでに湊渡さん自身で探しているのであるうし、探索一日目の今日のこれは、いわば下見だった。湊渡さんによる僕たちへの学校案内とも言い換えられるかもしれない。

「ま、妥当な結果だろうね。今日一日で見つけられるなんて、もともと思っていない訳だし」

「どうかな湊渡さん、あらためて学校を見てみて、何か思いつく事はない？」

「ん、分かりません」

「逆に探していない場所とかは思いつかないのかい？」

「え、それはたくさんありますよ、校長室とか、男子トイレとか」

湊渡さんがそういうと、栞が少しあきれたように聞き返す。

「君の探している【何かよく分からないもの】というのは、男子トイレで見つかる可能性のあるものなのかい？」

「え、だって栞さんが探していない場所って言ったからあ」

「まあそれは後から茉莉君に確認してもらうとして、それとは別に湊渡君に聞きたい事があるんだ」

「なんですかあ？」

「和田君と……それから水木君の事なんだが」

栞がそういうと、湊渡さんは少しだけ苦い顔をした。

「ああ、そのお、あの二人は、というより和田君は、その」

あゝ、分かりやすく言つとあゝ、いじめられてるんです」

「え!？」

「…………やはりか」

その言葉に対する二人の反応は正反対だった。

「で、でもさ。全然そんな風に見えなかったよ？どちらかというと和田君がみんなを避けていたような」

「君はやっぱ馬鹿だな。なんで嫌っている相手に好かれる必要があるんだい？嫌いたいやつには嫌わせておけばいいんだ。……私が見た所、君は水木の事が嫌いだろう？」

「そんな事は……会ったばかりだし……なんとも言えないよ」
「……前から言つべきだと思つていたんだが、君はいささかお人よし過ぎる。悪く言えば、誰からも嫌われたくないんだ。だから基本的に誰も嫌いたくない。そうだろう？」

「……わざわざ悪く言い直す必要がどこにあるのか分からないけれど。……確かに、僕は誰も嫌いたくないし、誰からも嫌われたくないかもしれない。でもそれは」

それは何だろう？その後続く言葉が、直ぐには浮かんで来なかった。もしかすると、栞の言う通りなのかもしれない。

言葉に詰まった僕を、観察するように眺め、栞はクラスで振りまいている、あの僕から見ると気持ち悪い笑顔を作り、続きを促す。

「それは？」

「……それは。……その」

「ふふふ。まあそれは今はいいよ。でも茉莉君。その事に対する君なりの「答え」は出しておいた方がいい。それで湊渡君。水木君はクラスで好かれているかい？」

「ええー！？とおーそれはあーんん？」

急に話を振られて、湊渡さんはどぎまぎしながら考えている。

「そんなに難しく考える必要はないんだ。なんとなく、雰囲気ですべてくれればいい」

「んーどうだろう」

「言っておくけど、人が周りにたくさんいるからといって、それがすなわち好かれてる事にはならないからね」

「んゝ、好かれて、いや、んゝ、難しいなあゝ」

「なら君はどうなんだい？」

「私はゝ、好きではないかなゝ、でも別に嫌いでもないからゝ」

後の嫌いではないというのは、慌てて付け加えたようにも見えた。

ここが学校の廊下だという事をふと思い出したようだ。放課後とはいえ、こんな場所では誰の耳があるか分からない。栞はちゃんとその辺分かっているのだろうか。

「まあそんな所だろう。ああいうタイプは、味方と同じくらいの敵を作るからね」

「ちよつと待つてよ栞。何だか話が逸れてないか？和田君がいじめられてるっていうのはどういう事なんだ湊渡さん？」

「んゝさつきはああ言ったけどゝあれはいじめというかゝ、うゝん」

「誰も積極的に関わろうとしないんだろう？水木君が嫌ってるからとかそういう理由で。だから結果的に孤立している。違うかな湊渡君」

「だいたいそんな感じですねゝ」

湊渡さんがそう答える。僕の理解が遅いのか、栞の理解が早すぎるのか、それはよく分からないけど、栞が小さく

「……………めんどろだな」

と呟いたのが聞こえた。

「……………何もない」

声に出した所で、何かが変わる訳でもないのだが、何となく声に出して確認してみると、やはり何もないことが確認できた。

もともと僕は独り言が多い方だとは思っけれど、最近は特に増えて来たように思う。んー、悪い傾向なんだろうなあ。人がいる場所で喋らないから独り言なのだろうし、別に直そうとも思わないのだけれど。だいたい意識している時点でそれは独り言ではないのではないかという、そもその意味が分からないうえに、明らかに間違っている考えを、僕はあわてて取り止めた。

だいたい。

栞に弱みを握られているという訳でもないのに、なぜ僕はこんなにも頑張っているのか。確かに湊渡さんの【何かよく分からないものを見つけてあげたいという気持ちはあるが、僕だけがこんな苦労をするのは割りに合わないのではないだろうか。

なんとなくいらした気分が消えないまま、僕は3階の男子トイレから出た。てつきり冗談だと思っていたのに、まさか本当に探す事になるとは。栞は栞で、やっぱどこかずれているんじゃないかと思う。

というか。もう高校生なのだから、男子トイレにくらい平気で入れるだろうに。今は放課後で、生徒もほとんどいないのだ。何を二人とも小学生みたいな事を言っているんだ。今の世の中、男が女子トイレに入るのは犯罪だけど、女が男子トイレに入ったくらい、往々にして許されてしまうのだ。ましてやここは学校なのだから、見つ

かった所で教師の指導くらいで済むだろうに。

そうやって僕が、どこにぶつけていいか分からない怒りをこねくり回していると、向こうから栞と湊渡さんがやって来た。あの二人は校長室を探していたらしい。そっちの方がよっぽど危険じゃないのか？

「……………どうだった？」

僕の怒りを、栞たちにぶつけるのは見当外れもいい所だと、本当は分かっていたから、僕は怒りが声に出ないように勤めて聞いた。

「何もなかったと思うよ。絶対無いとは言いつれないけど、でもそれを言うと他の場所も全部そうだから、茉莉君の方は？」

「何も無い。と思う。男子トイレにあつておかしいものは何も無かった」

「ん、やっぱり物じゃないのかな？」

「何とも言えないけどね。それは湊渡さんにしかきつと分からないし」

「そうかな、まあとりあえず今日はありがと」

「ん、まあばちばち探していけばいいと思うよ」

するとふいに、僕と湊渡さんが情報交換をしているのを黙って見ていた栞が口を開いた。

「……………む。茉莉君、何か君、怒っているのかい？」

栞が全部の男子トイレを探せとか言うからだろうという気持ちと、なんで分かったんだろうという気持ちと同時に沸き起こって、結局僕はその栞の問いに対して、上手く返答できなかった

17話 謎の視線? i 01

最後の一口をぐいと飲みきり、ことりとカップをテーブルにおくと、
栞がふと思いついたような口調で、とんでもない事を言った。否、
とんでもないというのは僕だけの事で、栞にとってはそれこそ何で
もないことなのかもしれない。だって栞にとっては僕でさえ「知り
合い」なのだ。そんな考え方の彼女にしてみれば僕が示す反応の方
がおかしいのだろう、きつと。

「あーそうだ茉莉君。君、和田君とはもうあまり喋らない方がいい
よ」

「な……………にを、言ってるんだ？栞？」

「何って、言葉の通りの意味だよ。だいたい君は馬鹿じゃないのか
？湊渡君は別として、私たちは必要以上に誰かと関わる必要はない
んだ」

「……………ちょっと待ってくれ栞。そう待ってくれ。そうじゃないん
だよ。僕が言いたいの」

「分かっているよ」

ぴしやりと、真剣な目と口調で栞が僕の言葉を遮った。

「分かっているさ、君の言いたい事くらい。君は何か最近勘違いし
ているようだけど、私だって鬼じゃないんだ。きちんと人間らしい
感情も持っているよ、一応ね」

一応、と付け加えた時に、少し悲しそうに顔を伏せたのが僕の見聞
違いでなければいいのだが。それともやはりそれは、そうあって欲
しいと願う僕の心が見せたものなのだろうか。

「でもそれでも、だ。履き違えてはいけない。私達の目的はあくま
でも、湊渡君の【何かよく分からないもの】の搜索なんだ。和田君
と水木君との間にある何かしらのわだかまりを解消する事ではない
んだ」

「何を言ってるんだ？分からないよ、栞。わだかまり？何の事だよ。

何でそれが話しちゃいけないなんて事になるんだよ!!」

「何をそこまで憤っているのか正直分からないが、当然だろう？人間ほどもんどくさい「物」はないんだ。わざわざその争いに首を突っ込むのは危険だよ。私たちは間違っても目立つ行動をしてはいけないんだ」

「違うよ!!それでもそれは違うよ栞!!」

「違うない。君は………君も本当は分かっているんだろう？あの水木君という奴はやつかいな事に、金とそれなりの権力を持っているんだ。そんな人間に敵対する行動を取るのは得策じゃないと、そう言っているんだ、私は」

「だからと言って………」

「そういう所だよ、結局。学校でも少し言っただけど、君は必要のない人間まで助けようとする。たとえ和田君を誰にも気づかれないようにいじめから救う事が出来たとしても。でもそれは何の解決にもならない。次の人間がいじめられるだけだし、その標的が私たちに向く確立はそれなりに高くなる。私達は転校生なんだ。そんな異物をあの水木君が見逃しておくとは思えない。それに彼はどうやら」

「

「?どうやら?」

「あー、いや、何でもない。どうでもいい事だ」

「………とにかく。和田君を救うのをどうでもいいと言ったのは取り消してくれ!!」

「はあ？妙な部分で絡んでくるね。まさかこんな短期間で、彼に好意を寄せているのかい？」

「そんな事関係ないだろう？」

「関係ない訳ないだろう？君はアレだな。本当に最近考える能力が低下したんじゃないか？湊渡君に何かされてないか、もう一度思い出してみるといい」

「何もされてないよ!!」

「あーもういいもういい。これ以上面倒事を増やさないでくれ。話

を変えるよ。私の勘違いであって欲しいのだけれど。学校を探索している時にね、ずっと誰かに見られてるような気がしなかったかい？」

18話 謎の視線? - 02 (前書き)

長らく更新せずにすみませんでした。

今は【世界の狂う重さ】の方を直しているので、こちらはもう少し遅れるかもしれませんが。実に申し訳なく思います。

【世界の狂う重さ(追加改悪版)】は、ほぼ書き直しくらいの勢いですので、その間よければそちらをお楽しみ下さい。

18話 謎の視線？ - 02

見られているような気は、別にしなかった。

改めて思い出してみても、例えあの時気を抜いて、あるいは逸らしていたとしても、

何かを見つけようとしていたのだから、それでもある程度は張り詰めていた。ように思う。

何度考えてもやっぱり結論は、

「……特に見られていた記憶はなかった」

に落ち着く。

「……そうか。だとすると……ああもうやれやれ実にめんどくさい事になって来そうだな」

「めんどくさい？」

「そうだよ。実にめんどくさい事、だ」

「……ごめん。よく分からないんだけど」

「……まあその方が君らしいね。その前に片付けておくと、君が気配を感じなかったという事は、大きく分けて三つの可能性がある」

「三つ？」

「君の【能力】のせいで、その監視していた人物の隠匿【いんとく】性が高まってしまった、という可能性がまず一つある。これはあくまでも私の予想の域を出ないんだが、多分君は【能力者】と会えばそれと分かると思うよ。分からなくても、何となく他の人と違うと感じる筈だ。まああくまでも私の観察してきて出した一つの予想ではあるんだけど」

「そうかな？」

自分では別に意識していなかったから、分からなかった。でも文字通り短く無い時間僕の事を「観察」してきた栞が言うのだから、そうなのかもしれない。

「そうだよ。そんな必要以上に敏感な君だから、もし【能力】を使
って監視されたりすれば、気付く筈なんだ。まだその【能力者】が
持っていないかった余計な部分を君が引き出したりしていない限りは」
そんな事を言われても知らない。僕は何もしていないのだから。

「二つ目は、私たちだけを監視していた可能性だ。私は別に感覚が
強化される訳ではないから、私が気付いたという事は、君によって
強化されているという一つ目の説は薄いかもしれない」

監視はされていたのか。というか栞はそう思っているらしい。

「で、三つ目は？」

「うん」

「いやうんじゃなくて」

「一つ聞くけど、君からみて私は可愛い部類に入るのかい？」

「はあ？」

何をいきなり。新手の自慢か？ 自画自賛か？

「どちらかと言えば、でいいんだ。どちらかと言えばかわいい方か
い？」

「そうだね。どちらかと言えば」

割と真剣に悩んでいるらしかったので、正直に答えた。

否、正直ではない。正直に言えば、とても可愛い部類に入ると思う。

「まあ君がそういうのなら、少なくとも外見はそうなのだろう。と
いう事は、一番避けたい可能性の芽が大きくなってきた」

「だから何なのさ、その三番目って」

「どうやらあの水木君とかいう男は、私の事が好きらしい」

そうかもしれない。あれだけ積極的に向こうから話しかけているの
だから、まあほぼ間違いないだろう。知らないけど。

「だから？」

「うん、だからね、三番目の可能性とは、普通の人間が私を監視し
ていたという可能性だ。それなら君が間抜けにも気付かなくても当
たり前だし、その場合、監視というよりも尾行と言った方が正しい

かもね」

と、栞は普段と何ら変わらぬ様子でそう言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5840i/>

学校の軋む重さ

2010年10月12日01時13分発行